姫路城城下町跡

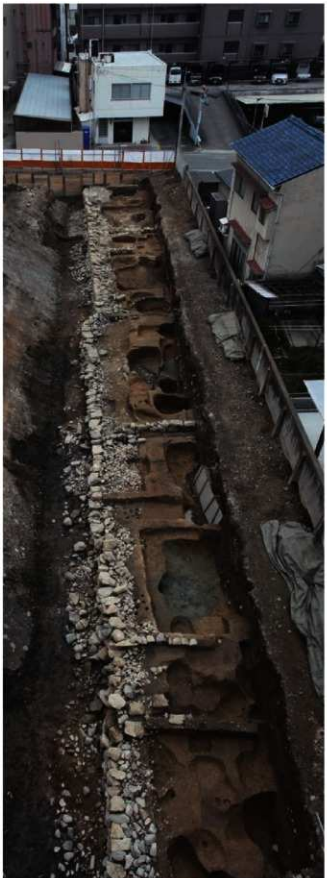
―姫路城跡第445次発掘調査報告書―

2022

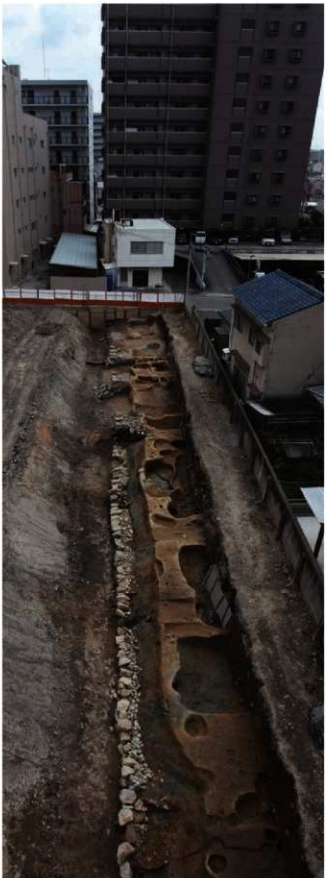
姫路市教育委員会

調査区全景（東から）

調査区全景（北東から）



1区第1面全景（西から）



1区第2面全景（西から）

序文

姫路市の中心部に位置する姫路城は、関ヶ原合戦の功により播磨52万石の大名になった池田輝政が慶長6年（1601）から同14年（1609）にかけて築城した平山城で、白鷺城とも呼ばれています。標高45.5mの姫山に配置された大天守を中心に、内堀・中堀・外堀の三重の堀で囲まれていました。

今回の発掘調査では、近世から近代にわたる中堀の埋没の様相を把握することができました。中堀の石垣は18世紀初頭ないし中葉以降に大きく崩壊・再構築され、以後は部分的に修築されながら近現代まで維持されてきたことが明らかになりました。石垣の崩落原因としては、寛延2年(1749)の市川の出水による大洪水による可能性が高いと考えられ、姫路城城下町の成立や歴史的な変遷を解明する上で貴重な資料が得られました。ここにその成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資するものです。

末尾になりましたが、発掘調査の実施及び石垣の現地保存に多大なご協力を賜りました事業者をはじめ関係の方々に心より御礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月

姫路市教育委員会
教育長　西田　耕太郎

例言・凡例

1. 本書は、姫路市元塩町101番において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、和田興産株式会社から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び報告書の執筆・編集は姫路市埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査に関する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4. 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系Ⅴ系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5. 土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
6. 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』（2010）に依拠した。
7. 調査にあたり次の各氏及び機関よりご指導、ご助言を賜りました。記して謝意を表します。
北垣聰一郎　田中哲雄　兵庫県教育委員会（五十音順・敬称略）

目　次

第1章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第2章　調査の概要 …… 1
第3章　遺構・遺物
　第1節　近世の遺構・遺物 …… 4
　第2節　中世以前の遺構・遺物 …… 7
第4章　総括 …… 7
附　章　石垣の保存 …… 8
報告書抄録

表目次

表1　南部中堀（元塩町周辺）の既往調査一覧 …… 3
表2　出土遺物観察表 …… 23

写真目次

写真1　大正15年（1926）撮影の空中写真 …… 4

図目次

図1　周辺の遺跡 …… 2
図2　調査位置図 …… 2
図3　調査区割図 …… 2
図4　南部中堀（元塩町周辺）の調査位置図 …… 3
図5　『姫路侍屋敷図』にみえる中堀の屈曲部 …… 4
図6　鉄枠と洗砂による石垣の保存 …… 8
図7　調査区全体図（第1面） …… 9・10
図8　調査区全体図（第2面・石垣解体後） …… 9・10
図9　調査区南壁断面図 …… 11
図10　堀断面図 …… 12
図11　石垣平・立・断面図 …… 13・14
図12　石垣（解体後）・石垣（前段階）基底部平・立・断面図 …… 15・16
図13　石垣断面a～h見通し図 …… 17
図14　中堀・石垣前面盛土・石垣崩落層出土遺物 …… 18
図15　石垣裏込（1）出土遺物 …… 19
図16　石垣裏込（2）出土遺物 …… 20
図17　土塁平・断面図 …… 21
図18　土塁・屋敷境石組1下層・SK02・SK06・SK07・SK26出土遺物 …… 21
図19　SD31・SD32・SD39平・断面図 …… 22
図20　SD38平・断面図 …… 22
図21　SD32出土遺物 …… 22

写真図版目次

写真図版1　遺構写真(1)　写真図版2　遺構写真(2)　写真図版3　遺構写真(3)　写真図版4　遺構写真(4)

第1章　調査に至る経緯と経過

姫路市元塩町101番において集合住宅の建築工事が計画された（図1）。計画地が姫路城城下町跡（県遺跡番号020169）に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から令和2年5月18日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では国庫・県費補助事業として5月22日から30日にかけて遺跡の保存状況を把握するための確認調査を行った結果、姫路城中堀の堆積土及び近世陶磁器を検出するとともに下層の一部で地山及び中世以前の土師器を確認した。さらに中堀の石垣を確認するため、同じく国庫・県費補助事業として追加調査を実施したところ、石垣が良好に遺存していることを確認した（姫路城跡第438次調査　調査番号：20200073）。石垣は姫路城を構成する重要遺構であることから事業者と保存協議を重ねたが、最終的に工事により遺構の破壊を免れることができない769㎡を対象に本発掘調査（姫路城跡第445次調査　調査番号：20200466）を実施することとし、石垣の一部については事業者の協力を得て附章のとおり現地保存することとした（図3）。発掘調査は令和2年12月24日付で事業者と協定を締結した上で開始した。現地調査は令和3年1月13日から4月16日まで行った。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会
教育長　西田耕太郎（令和3年4月1日～）
　　松田克彦（～令和3年3月31日）
教育次長　峯野仁志（令和3年4月1日～）
　　岡本　裕（～令和3年3月31日）
生涯学習部
部　　長　福永安洋

文化財課
課　　長　福永安洋（兼務　令和3年7月1日～）
　　村田　泉（令和3年4月1日～6月30日）
　　大谷輝彦（令和2年4月1日
　　～令和3年3月31日）
課長補佐　大谷輝彦（～令和2年3月31日）
技術主任　中川　猛（令和3年4月1日～）
　　同　　関　　梓

埋蔵文化財センター
館　　長　大谷輝彦（令和3年4月1日～）
　　（7月1日～文化財課主幹を兼務）
　　松本　智（～令和3年3月31日）
課長補佐　岡崎政俊
　　森　恒裕
　　多田暢久（令和3年4月1日～）
技術主任　南　憲和

第2章　調査の概要

調査地は姫路城の総社門から不明門間の中堀の一部及び外曲輪の一部に跨がる（図2）。姫路市では中堀を便宜的に北部・西部・南部・東部に区分しており、このうち南部中堀は埋門から不明門を越えた堀の屈曲部までを指す。南部中堀に関連する調査地周辺の既往調査は図4及び表1にまとめた。

姫路城及び中堀が描かれた最古の絵図は、慶長18年（1613）から元和3年（1617）頃の作図とされる岡山大学池田文庫所蔵の「姫路城内家臣用屋敷割図」である。外曲輪は描写されていないが、町割は池田輝政段階（1600～1617）において整備が進められたとされる(註1)。姫路城は本多忠政段階（1617～1631）に西の丸や三の丸の居館等が整備され、池田氏から第1次本多氏時代（1600～1639）を通じて近世城郭としての姫路城が完成した。それ以後は新規の造営はなく、既存の石垣に崩れや孕みが生じた際に修復普請を幕府に願い出、その許可を得てその時々に普請が行われた。

酒井氏時代には寛延2年（1749）7月の大雨により市川が出水し、城下一帯は内曲輪を残して大洪水に見舞われた。その被害状況を描写した「姫路城下浸水被害図」によると、船場川右岸等の城下町南西隅は甚大な被害を被ったことが窺われる。酒井氏はその後に崩れ・孕みが生じた石垣35箇所の普請に着手している。調査地周辺の被害状況も記載されており、それによると不明門の西側の土塁内側は浸水したものの、中堀の南側から外曲輪にわたる範囲は被害を免れたようにみえる。しかし、寛延4年から宝暦4年(1754)の「姫路侍屋敷図」(註2)では中堀南面の石垣が僅かに北にクランクしており（図5）、それが寛保2年（1742）から寛延2年（1749）とされる「姫路城下図」以前の絵図には表現されていないことは留意される。

調査地の外曲輪は中堀に沿って形成された町人町に該当し、慶安2年（1649）から寛文7年（1667）の「姫路御城廻侍屋舗新絵図」に「本塩町」と記される。西塩町（現在の塩町）に対して「元（本）塩町」と呼ばれた。その町名は南に位置する古二階町とともに近世城下町の町割成立以前に町場が形成されていたことを想起させる。

明治時代以降は中曲輪以内が軍用地となり、練兵場や兵舎の設置に伴い武家屋敷等の遺構が失われた。外曲輪は江戸時代の地割を踏襲した市街地となり、現在に至っている。

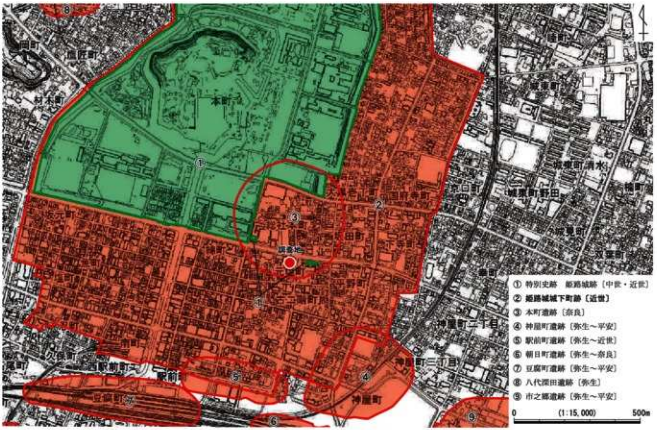


図1　周辺の遺跡

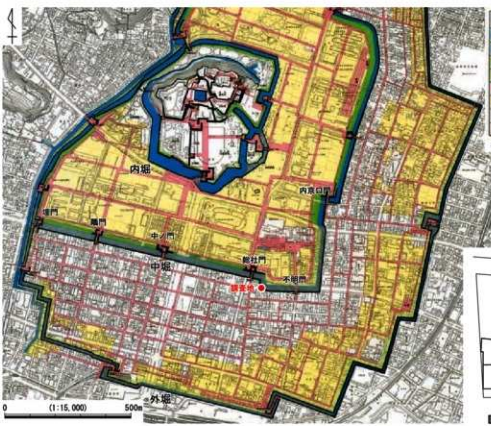


図2　調査位置図

図3　調査区割図

図4　南部中堀（元埋町周辺）の調査位置図

調査次数	調査期間	面積(㎡)	概　要
第 8 次	1978. 10. 23 ～ 1979. 5. 29	272	国道2号の拡幅工事に関連して行った調査である。調査は、現存する石垣の本来の位置関係と土盛の範囲を確認することを目的として行われた。調査の結果、残存する高石垣は中ノ門の東端部であること、土盛は本来の推計約2ｍ側ふれていることなどが明らかになった。また、中ノ門につながる土橋の東西両側面の石垣が検出されており、土橋の幅が16.7ｍであることも判明した。石垣裏込の栗石幅は約1ｍで、その背面に盛土が検出されたことから、土橋は地山を掘り残して構築されたと可能性を想定している。
第 33 次	1983. 12. 12 ～ 12. 14	85	国道2号の拡幅工事に関連して行った調査である。土盛と中堀の端を判明にすることを目的として行った。調査の結果、本来の土盛推計2～3ｍ側ふれていることが確認された。このことは第8次の成果とも矛盾せず、堀を埋める際に土盛根を削っていたことが判明した。
第 37 次	1984. 7. 2 ～ 9. 26	162	国道2号整備事業に伴う南部中堀に面した総社門跡の調査である。総社門西面の石垣の位置及び構造に関する資料を得ることを目的として実施した。調査の結果、中曲輪から中堀への排水溝を確認するとともに、水面下の中堀石垣の南面には石垣の縁みを切ったかの栗石が多数認められなど、中堀と石垣の関係が明らかになった。
第 60 次	1997. 8. 7 ～ 8. 27	90	国道2号の整備事業に伴う試掘調査。調査は兵庫県教育委員会が実施した。19箇所の試掘坑を設定し、南部中堀の南側石垣が検出された。検出面の深さは現地表から0.9～1.2ｍで、石垣の上面は後世の攪乱を受け破壊されている箇所もあった。この成果に基づき、工事の設計変更を行った結、設計変更が不可避な部分の本発掘調査を行うこととなり、第67次、第85次、第86次と継続する。
第 67 次	1988. 2. 18 ～ 3. 3	46	第60次調査に基づく調査。上盛は攪乱を受けていたものの少なくとも1～2段の中堀南側石垣は遺存していた。延長約27ｍ分検出されるとともに、調査区の東端で中堀が南へ屈曲する部分が検出されていた。
第 85 次	1988. 12. 5 ～ 12. 20	127	第60次調査の成果に基づき、第67次調査に引き続く調査である。総社門西方の中堀南側の石垣が約51ｍにわたり検出された。また、外曲輪から中堀に通じる排水口も検出されている。検出された石垣は、下段の石は幅0.4～0.5ｍ、上段の石は幅0.2～0.4ｍと小さい傾向があることも明らかになった。また、一部には最下段のるが、堀の底より浮いている事例も確認された。石垣ラインも非常に蛇行っており、下段の石は之字状に突出しており、上段の石垣よりも0.5～1ｍ側へ出ているものもあった。
第 86 次	1989. 1. 6 ～ 1. 14	52	第85次調査に引き続いて行われた調査である。総社門西側の中堀南側石垣が延長13.5ｍ、4～7段分検出された。石材の大きさは最下段の石が幅0.8～0.6ｍと最も大きく、下から1～3段は4段目以上の石より大きいものが使用されていた。このことから石垣の上段は積み直されたものと推測されている。また、断割によって、堀の落ち込みの縁となる箱構造砂礫を検出しており、最下段の石がこの縁より浮いていることが確認された。石垣ラインも非常に蛇行っており、下段の石が上面石垣よりも0.5～1ｍ側へ出ているという、第85次調査と同様の状態が確認された。
第 97 次	1990. 2. 10 ～ 3. 28	32	大手前地下駐車場建設に伴う調査である。南部中堀南側の石垣が3段分検出された。一部であるため、高さ等は不明であるが、石材の大きさ、積み方は第60次・第85次・86次調査で検出された石垣と類似している。
第254次	2006. 4. 17 ～ 5. 16	84	南部中堀の南側石垣及び町境内の遺構が検出された。南側石垣は、最も残りの良い部分で高さ約1.3ｍを測る。石垣の前面には、堀内の堆積土が確認でき、大きく上部堆積土と下部堆積土に分層された。また、既往調査成果を参考にすると今回の調査で検出された石垣については、何度か積み直しがあることや石垣前面は蛇行っていることが明らかになった。また、町境内については現見を受けている部分もあったが、礎石遺構は残存していることが判明した。断割調査によって江戸時代の遺構面が下層にも遺構面が存在していることが確認された。調査で明らかになった石垣を含む中堀については、櫓跡を構成する重要な遺構であることから事業者と保存協議を行った。その結果、事業者は埋蔵計画を変更し、中堀の南側石垣以北については現地保存されることとなった（平成24年1月24日、特別史跡に追加指定）。
第261次	2010. 4. 1 ～ 5. 22	676	第254次調査に引き続いて行われた調査である。18世紀後半から16世紀初頭にわたる遺構面が上に積作土が存在し、その上面に近世町屋の遺構面が形成される変遷が明らかになった。南者に属す建物跡が近世城下町の軸線と概ね揃っており、城下町建設以前の軸線が近世の町割りに踏襲されたと考えられる。
第422次	2019. 6. 5 ～ 8. 20	220	近世町屋に伴う遺構を多数検出した。遺構の位置により、間口に建物、裏手に廃棄土坑等を伴う空間地、その間に井戸が配されるという姫路城城下町跡における典型的な町屋の姿を確認できた。また、整地の中央付近で溝列跡を検出した。下層からは中世・古代の遺構を検出した。中世の遺構としては、多数の柱穴・溝があり、理土の色調から城下町建設に近い時期のものが多いと推測される。柱穴は密集しており、建物等の種々建が繰り返し行われたことが判る。古代の遺構は、溝2条と少ない。
第442次	2020. 10. 27 ～ 2021. 2. 18	525	都市計画道路内濠状東線の拡幅工事に伴う調査である。中堀とそれに伴う南面石垣を検出した。検出した石垣は東西16.4ｍ分で、上から2～3段分が調査を行った。石垣の南側では、外曲輪に広がる町屋の遺構を検出した。町屋の整地是を示す層からみて、少なくとも4.4軒分の屋敷地が存在したと考えられる。中堀石垣と外曲輪の町屋遺構を同時に調査した初めての調査事例となった。中堀の南側石垣については現地保存することとなった。

表1　南部中堀（元埋町周辺）の既往調査一覧

上記一覧表の作成にあたっては、以下の文献を参考・引用にした。
姫路市立城郭研究室(編) 1994『日女道かぶ』日本城郭研究センター
姫路市教育委員会 2011『姫路城城下町跡－姫路城跡第254次 南部中堀発掘調査報告書－』
姫路市埋蔵文化財センター 2018『姫路城世界遺産登録25周年記念 白鷺城翔－姫路城築城前夜－』
姫路市埋蔵文化財センター 2020『姫路城城下町跡（元埋町）発掘調査』(現地説明用資料)

発掘調査は発生土の仮置場を確保するため調査区を1区・2区に分割し、石垣より南側は2面調査を行った（図3）。石垣については解体前後の2回に分けて3次元レーザー測量を行った。現代の盛土・攪乱土等を機械で除去した後、遺構を人力で発掘し、記録保存のための写真撮影及び実測による平・断面図等の作成を行った。

調査地の現況地盤は標高13.5m前後である。中堀と土塁を除く範囲の基本層序は、現地表から深さ約50cmまでは煉瓦等を含み近代以降に形成されたことが明らかな土層が存在し、城下町建設以前の耕土の可能性がある灰黄色極細砂～細砂（20～30cm）を経て、明黄褐色シルト質粘土（地山）に至る（図9）。地山の検出レベルは調査区南壁東端で標高12.3m、西端で12.0m、北東端で12.3mであった。2面調査のうち、1面目は石垣検出面、2面目は地山面で遺構検出を行った。遺構は1面目では中堀・石垣・土塁、外曲輪において**屋敷境石組1～3**、土坑（**SK02・06・07・26**）等を、2面目では外曲輪において溝（**SD31・32・38・39**）のほか多数のピット・柱穴を検出した（図7・8）。埋土等からみてピット・柱穴の大半は中世に属すと思われる。

（註1）姫路市史編集専門委員会（編）1988『姫路市史 第十四巻 別編 姫路城』　　（註2）姫路市立城郭研究室 2014『姫路城絵図集』

第3章　遺構・遺物

第1節　近世の遺構・遺物

(1) 中堀

調査地の中堀は、享保15年（1730）頃と推定される「姫路城絵堀管尺大間数図」に「堀幅拾間貳尺」、「水深サ五尺」と記載される。1間を1.82m、1尺を0.303mとして換算すると、堀幅は約18.8m、水深は約1.5mとなる。南面には石垣、北面には土塁が構築されていた。南部中堀は近代以降、明治45年（1912）から大正12年（1913）にかけて総社門から歩兵第39連隊南側（鵤門付近）まで、大正14年と昭和2年（1927）に総社門から内京口門までの埋め立てが行われた。大正15年の産業博覧会の空中写真からは調査地付近の中堀の埋め立て前の状況が窺える（写真1）。その後、昭和7年に埋門から歩兵第39連隊南側までが埋め立てられ、その上に国道2号が開通し現在に至っている。

堀は1-1～1-3区、2-1～2-5区の断面から、堀底はほぼ平坦で中央部の標高9.9m前後を最深部とし、南北に緩やかに立ち上がっていたとみられる（図10・写真図版1）。土塁の裾部に攪乱があり、南面石垣の基底部との間隔で堀幅を計測すると最大で23.0m、最小で21.5mとなる（図10断面A-A´）。堀底は拳大の円礫を含む砂質土（地山）で、その上位に滞水していたことを示す粘質土（11～15層）が約1.2mの厚みで堆積していた。

遺物はB-B´断面の25層からベロ藍を使用した施釉陶器碗（図17-8、以下、遺物番号は通し番号のみ記載する）、「タムシ液」のエンボスがあるガラス製の薬瓶（9）、「和田山　わだやま」と書かれた汽車土瓶（10）が出土しており、明治維新後も滞水状態が継続していたとみられる。粘質土の直上はコークス主体の層で一気に埋められており、B-B´断面の13層から瑠璃釉の染付小瓶（1）、内外面に「壽福」が連続して印字された印判手の染付碗（2）、ガラス瓶（3～6）、刻印を有する耐火煉瓦（7）が出土した。

4は円形の胴部に目盛り線のエンボスがある薬瓶である。5は円筒形の化粧クリーム瓶で、白色不透明を呈し底部外面

図5　『姫路侍屋敷図』にみえる中堀の屈曲部
（姫路市立城郭研究室所蔵）

写真1　大正15年（1926）撮影の空中写真
（姫路市史編集室所蔵）

に「AUBRY SISTERS MAY 15 1916」のエンボスがある。AUBRY SISTERS社は1910年アメリカ合衆国オハイオ州トレドに設立された化粧品会社で、1925年に閉店している。6は体部に「江戸の華」のエンボスがある。7は直径22㎜の丸とY字を組み合わせた形をモチーフにした刻印から大阪窯業の製品とみられ、両面に刻印が押される。大阪窯業は明治31年(1898)に大阪府堺に本社工場を移し、以後府下最大の煉瓦製造業者に成長し、関西地方のみならず全国に製品を供給している。

13層及び25層の遺物は堀の埋め立て時に混入したものとみられ、大正15年(1917)から昭和7年(1932)の間に帰属すると考えられる。

(2) 石垣

中堀の南面石垣を東西51.2mにわたって検出した(図11・12・写真図版2)。高さは0.7～1.5mを測る。調査区中央部で0.9m北(堀)側に鍵の手形に屈曲していた(以下、屈曲部と呼称する)。石垣ラインは屈曲部から東側はほぼ直線となるが、西側は波打っており、積み方も東西で異なっていた(図7・11・写真図版2)。屈曲部の築石の様相からみて、東側の石垣の方が後出する(図11i-i´断面・写真図版2)。築石はほぼ割石で川原石を一部含む。矢穴は確認されなかった。築石背面は1.5～1.8mの背後から地山を大きく根切し、その間には川原石主体の栗石(裏込石)が充填されていた(図13・写真図版3)。

屈曲部以東の石垣は、延長24.5m、高さは最大1.5mを測り、最大7段積まれていた(図11)。西側の石垣との顕著な差は、凝灰岩(黄竜石)系石材の多用である。

屈曲部から東側の基底石の前面では、断面bから断面d付近にかけて栗石が堀側に下降しながら面的に広がる状態で検出された。これを一部断ち割った結果、栗石の下層は盛土で、栗石は盛土の表層にのみ確認された(図11)。遺物(図14)は石垣前面の盛土及び石垣前面に流出した後述する前段階の石垣に由来する栗石混じりの土層(以下、石垣崩落層と呼称する)から、丹波焼把手付鉢(11)、炮烙(12)、備前焼擂鉢(13)、施釉陶器碗(14)、染付皿(15)、左巴文の軒丸瓦(16・17)、上向きに発した唐草が2反転する軒平瓦(18)、唐草文の軒平瓦(19)が出土した。遺物の時期にまとまりは認められない。栗石の下層を全て確認できた訳ではなく、堀底(地山)と石垣基底部との層序的な関係を把握することもできなかったが、江戸時代のある時期に石垣基底部と堀の間に石垣の構築または石垣の維持管理に伴う作業用の空間が設けられ、栗石はその表層に部分的に敷かれていた可能性がある。

東端から断面e付近までは基底部に直径約10㎝の胴木が使用されていた(図12・13・写真図版4)。その上に基底石を据え、前面よりややセットバックした位置から2段目以降をほぼ垂直に近い角度で積み上げていた。長さ110～130㎝、小口の各辺30～40㎝の凝灰岩(黄竜石)系の直方体石材を、石垣の中段から上段にかけて築石として平行または直角方向に使用していた。胴木は姫路城の石垣では一般的な用法ではなく、その使用及び築石の様相から、当該部は最も新しい段階で積み直された範囲と考えられる。遺物(図15)は断面a(図13)の栗石層(3層)から染付皿(20)のほかガラス片、断面b(図13)の栗石層(3層)から陶胎の青磁碗(21)、漳州窯系の青花碗(22)、染付碗(23)が出土した。

断面cから屈曲部までは石垣崩落層の上に基底石を堀側に出し、ややセットバックした位置から2段目以降をほぼ垂直に近い角度で5～6段積み上げていた。この範囲では凝灰岩(黄竜石)系石材は使用されるものの、前述の直方体石材や胴木は確認されなかった。断面d-e間(図13)の栗石層(2層)から印判手の染付碗(24)が出土したため、明治時代以降に再構築がされた範囲と考えられる。

西側の石垣は屈曲部を含むと延長27.3m、高さは0.7～1.2mを測り、3～4段積まれていた(図11・写真図版3)。凝灰岩(黄竜石)系石材は使用されず、東側の石垣と比べ、断面g-j間を除き、築石の長辺を横位に配置する傾向が認められた。断面g-j間は築石の向きが一定せず、崩落後に乱雑に復旧した状態とみられる。

解体調査の結果、屈曲部から西側の石垣は前段階の石垣(以下、石垣(前段階)と呼称する)が築石・栗石(裏込)層とともに崩落した後、前面に流出した栗石と土砂の上に積み直されたものであることが明らかになった(図13・写真図版3)。この改修に伴い屈曲部が形成されたと考えられる。現状の石垣基底石の下端レベルは屈曲部の東西に関わらず標高11.5mでほぼ一致する。一方、屈曲部以西では石垣(前段階)の基底部は、屈曲部以西では記録保存の対象となる深さより下に続いていた。調査区西端の基底部は11.1mより下に位置することは確実であり、本来の基底部は東から西に下降していたとみられる(図12・写真図版4)。

石垣（前段階）は屈曲部から延長26.7mにわたり検出した（図12・写真図版4）。最も残りの良い部分で3段分（約60㎝）を検出したが、前述のとおり当該石垣の基底石は改修後のものより低い位置に据えられている。石垣ラインは東側の石垣の延長線と一致する。裏込石（栗石）は拳大の川原石で、西側の石垣のものと比べると大きさのばらつきが小さい。地山を30～50°の角度で根切し、栗石層を25～60㎝の幅で確保していた（図13・写真図版3）。

遺物（図15・16）は断面e（図13）の1層から、くらわんか手の染付碗（25）、唐草文の末端が残る軒平瓦（26）、2層（栗石層）から陶胎の染付碗（27）、丹波焼鉢（28）、丸瓦（29）、糸切り底の土師器皿（30）、断面e-f間の栗石層から肥前系施釉陶器皿（31）、施釉陶器土瓶（32）、雨降り文の染付碗（33）、石垣（前段階）の栗石（裏込）層から体部下半に平行タタキを有す炮烙（34）、軒丸瓦（35）、断面f（図13）の1層から氷裂文の染付小碗（36）、棟込瓦（37）、断面f-g間の石垣（前段階）の栗石（裏込）層から石臼（38）、石垣の栗石層から備前焼大甕（39）、断面g（図13）の1層から橘唐草文の軒平瓦（40）、2層（栗石層）から左巻巴文の軒丸瓦（41）、焼締陶器壺（42）、染付皿（43）、桟瓦（44・45）、3層からコビキBの丸瓦（46）、断面h（図13）の1層からよろけ縞文の染付碗（47）、炮烙（48）、2層（栗石層）から花鳥文の染付皿（49）、京・信楽系の施釉陶器碗（50）、3層から受口の付く施釉陶器灯明皿（51）、7～10層から備前焼盤（52）、肥前系施釉陶器皿（53）、肥前系施釉陶器碗（54）、染付筒形碗（55）、染付碗（56）、焼塩壺（57）、コビキBの丸瓦（58）、平瓦（59）、11層から丹波焼擂鉢（60）が出土した。また、断面g（図13）1層の42は3層の破片と、断面h（図13）7～10層の52は石垣（前段階）の栗石（裏込）層の破片とそれぞれ接合した。

石垣の栗石（裏込）層の中に32・33が入ることから、石垣は18世紀初頭ないし中葉以降に再構築されたと考えられる。同様に石垣（前段階）は34・52～59が入ることから17世紀前半頃に構築されたとみられ、築城当初の石垣の可能性も考えられる。また、天端石と同レベルで栗石（裏込）層を覆土する層に40・47が入ることから、江戸時代後期以降に堀端が盛土されたことが判る。

(3) 土塁

堀の北側にあたる調査区北端部で土塁の基底部とみられる土層を南北3.7m、東西1.6mにわたって検出した（図17・写真図版1）。絵図によれば、土塁の幅は17～18m程度と推定されるため、堀側から全幅の約20%を調査したことになる。高さは構築土の可能性のある土層を含むと0.85mを測る。基底部には層厚約5㎝の薄い土層が4層（6～9層）水平に確認され、そこから拳大円礫を含む細砂～中砂で一気に構築されたとみられる。

堀との間には東西方向の攪乱があり、堀の埋土と土塁との層序的な関係及び土塁の斜度を把握することはできなかった。堀の埋土に土塁由来とみられる流入土が確認されなかったことは、国道2号の建設に際して土塁を崩して堀を埋めたのではなく、土塁を道路の基底部に利用した可能性があると考えられる。

遺物（図18）は3・5層から基筒底の施釉（鉄釉）陶器皿（61）が出土した。17世紀前半頃とみられる。

(4) 屋敷境石組

石垣の天端石に直角に取り付く石組溝を3条検出した。いずれも外曲輪に展開する町屋の屋敷境の区画施設とみられ、現在の地割とほぼ対応する（屋敷境石組1～3）。

屋敷境石組1（図7・写真図版2）　石垣断面cの西側の築石の上から調査区外に延びる。両側面に割石が1～2段構築され、幅0.3mで5.0m以上続く。下層から染付端反碗（62）が出土した。幕末以降のものである。

屋敷境石組2（図7・写真図版2）　石垣断面f-gの中間やや東寄りの築石の背後から調査区外に延びる。残りは良くなかったが、両側面に割石が1～2段構築され、幅0.3mで3.8m以上続く。

屋敷境石組3（図7）　石垣断面jの築石の上から調査区外に延びる。残りは良くなかったが、西に石の面を向けた割石を2.3mにわたって検出した。

これらはいずれも石垣の築石ないし栗石の上位に構築されており、初現は遡っても江戸時代後期とみられ、地割は現代まで踏襲されてきたと考えられる。屋敷境石組1と2の間隔は22.5m、同じく2と3の間隔は9.2mを測る。石垣の屈曲部は屋敷境石組1から12.0m、屋敷境石組2から10.5mの距離に当たる。屋敷割の間隔からみると、今回の調査範囲では区画遺構を確認できなかったが、屈曲部が屋敷地境と対応していたとしても不思議ではないと思われる。

(5) 土坑

土坑の中には幕末から近代に属すものが多数存在すると思われる。ここでは遺物が一定量出土するなど、時期の比定が可能な遺構、特徴的な遺構や石垣に関係するものを中心に報告する。

SK02（図7・18） 石垣断面aの延長部において栗石層より外（町屋）側で検出した。染付端反碗（63）、施釉陶器鉢（64）が出土しており、これらは幕末から明治時代以降のものとみられる。

SK06（図7・18） 埋土に焼土を多く含む。施釉陶器灯明皿（65・66）、染付仏飯具（67）、染付端反碗（68）、染付皿（69）、菊文をもつ面子（70）が出土した。これらは幕末から明治時代のものとみられる。

SK07（図7・18） 後述する**SD31**を切る。染付端反碗（71）、施釉陶器鉢（72）、「十六メ（ヵ）」と印刻された用途不明の土製品（73）のほか、図化に耐えなかったがトビガンナを有す行平鍋の細片が出土した。これらは幕末から明治時代のものとみられる。

SK26（図7・18） 石垣の根切りによって切られる。肥前系京焼風陶器碗（74）のほか、図化に耐えなかったが、肥前系施釉陶器皿・染付碗・備前焼壺の細片が出土した。17世紀前半から18世紀前半頃のものとみられる。

第2節　中世以前の遺構・遺物

SD31（図8・19・写真図版4） 幅1.4m、深さ（検出面からの深さを指す。以下も同じ。）0.7mのV字状の断面形を呈す。検出長は2.5mで正方位の軸線をもつ。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

SD32（図8・19・21） 幅4.1m以上、深さ0.6mを測り、**SD31**の東に平行する。遺物は土師器塊（75）、備前焼擂鉢（76・77）・甕（78）、コビキAの丸瓦（79・80）、破面に炭が付着する一石五輪塔の残欠（81）が出土した。これらの時期は15世紀前半から16世紀後半にわたる。

SD38（図8・20） 幅0.5m、深さ0.2mを測る。検出長は1.7mで正方位の軸線をもつ。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

SD39（図8・19・写真図版4） 幅1.2m、深さ0.3mを測る。検出長3.5mでN-13°-Eの軸線をもつ。B-B′断面付近から北西に分岐するが、分岐した溝は後世の遺構に大半を切られていた。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

第4章　総括

姫路城南部中堀の南面石垣から北面する土塁にかけて横断的に調査を行うことで、近世から近代にわたる中堀周辺の変遷を把握することができた。

石垣ラインは途中で堀側に屈曲しており、その屈曲部は石垣（前段階）が崩落した後、前面に流出した栗石と土砂の上に石垣を再構築したことで生じたこと、積み直しの時期は18世紀中葉以降で、以後部分的に修築されながら近現代まで維持されてきたことが明らかになった。石垣（前段階）は17世紀前半頃に構築されたとみられ、築城当初の石垣の可能性も考えられる。

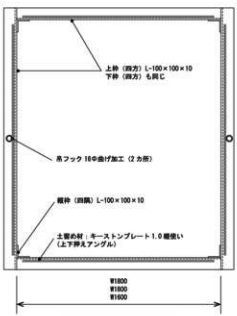
姫路城城下町は寛延2年(1749)に市川の出水により甚大な被害を受けた。同4年から宝暦4年(1754)の間に描かれた「姫路侍屋敷図」では、それまでの絵図で表現されていなかった石垣ラインの屈曲が描かれており、石垣（前段階）の崩落と復旧は、この水害と関連している可能性が高いと考えられる。

中堀以南の外曲輪において町屋の敷地境の石組溝を3条検出した。これらの初現は遡っても江戸時代後期とみられ、地割は現代まで踏襲されていることが明らかになった。

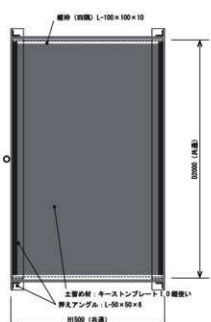
城下町の下層で検出した3条の正方位の溝から、正方位の地割は16世紀後半まで存続していたと考えられる。

附章　石垣の保存

今回の調査では、事業者の協力を得て石垣の一部を現地保存することができた。保存対象となった3箇所（図3）のうち2箇所を幅1,800㎜×奥行2,000㎜×高さ1,500㎜、1箇所を幅1,600×奥行2,000×高さ1,500の鉄枠で囲い、石材間を砕石土嚢で養生した上で洗砂を充填した（図6）。また、石垣（前段階）の基底部はそのまま現地保存している（図12・写真図版4）。



土留め枠平面図



土留め枠側面図

①鉄枠設置作業状況

②鉄枠設置状況

③洗砂充填状況

図6　鉄枠と洗砂による石垣の保存

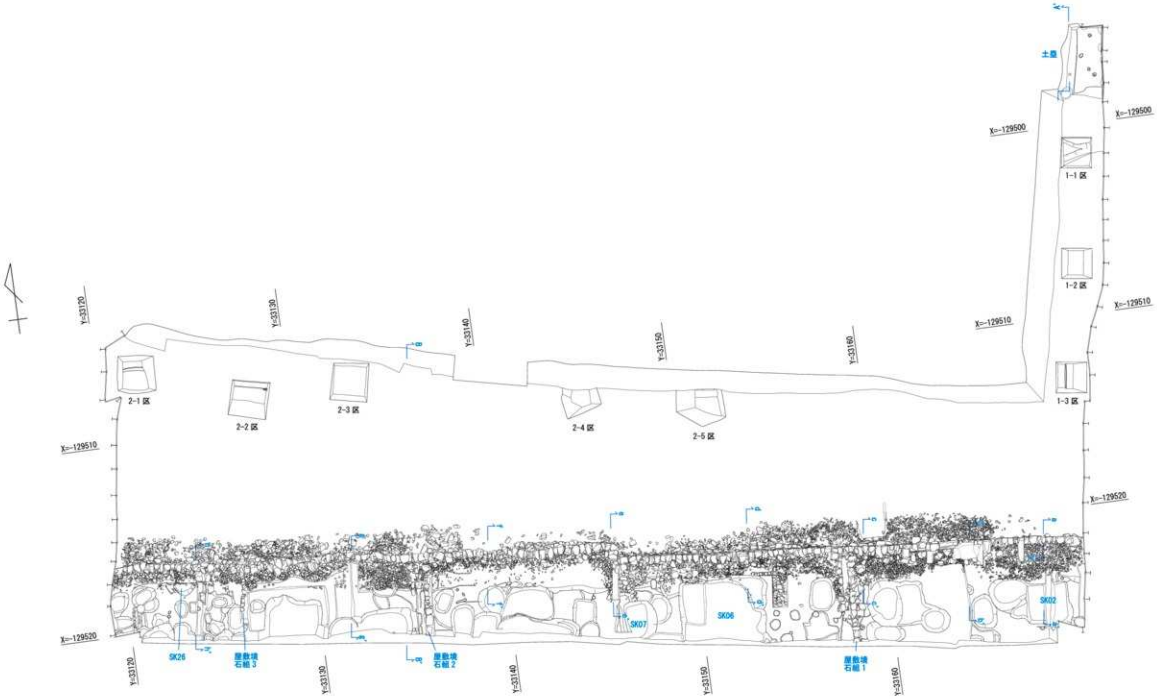


図7　調査区全体図（第1面）

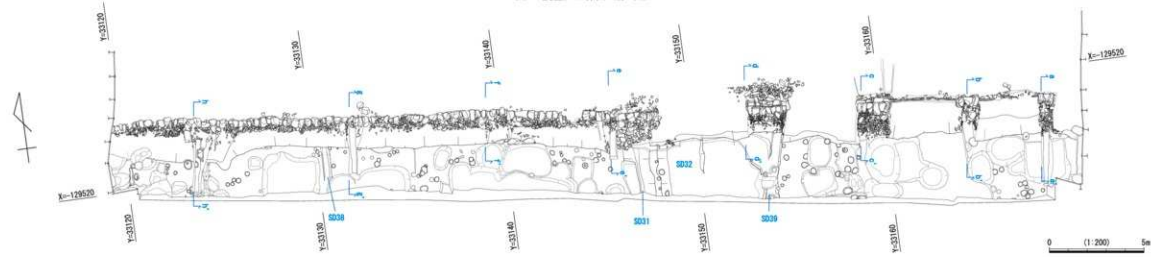
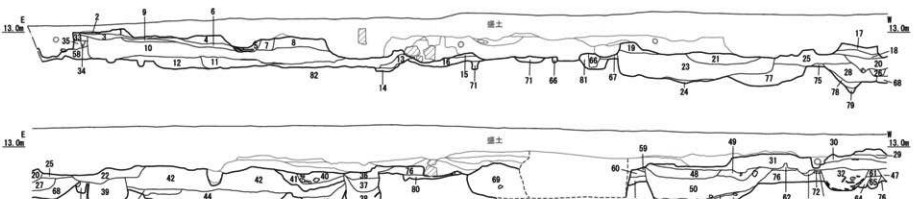
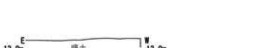


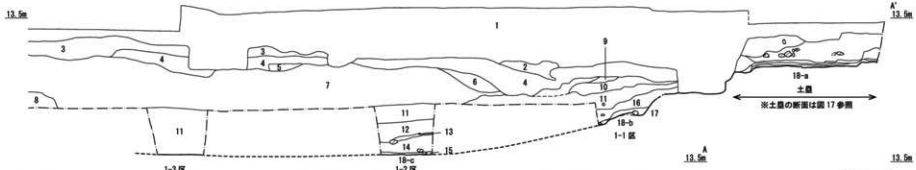
図8　調査区全体図（第2面・石垣解体後）



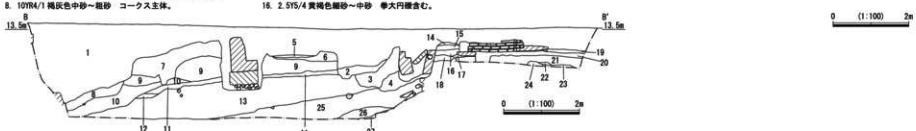


1. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　漆喰含む。
2. 三和土
3. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　にぶい黄褐色土ブロック含む。
4. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　瓦含む。
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　漆喰多く含む。
6. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　地山的均質。
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　貝・瓦含む。
8. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　瓦含む。上層界に三和土・焼土層。
9. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　地山ブロック・瓦含む。
10. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　比較的均質。貝・瓦含む。下層界に炭層。
11. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　炭含む。
12. 10YR6/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック含む。
13. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　炭含む。地山ブロック少ない。
14. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂　炭色ブロック含む。
15. 10YR7/6 明黄褐色シルト質細砂
16. 10YR4/6 褐色シルト質細砂
17. 10BG3/1 暗青灰色極細砂～細砂　焼土含む。
18. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　瓦含む。
19. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土含む。
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　瓦含む。
21. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　焼土を含まない。
22. 10YR5/1 灰黄褐色極細砂～細砂　炭・瓦含む。
23. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　焼土多く含む。(SK06)
24. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　焼土を含まない。
25. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂　径3cm大礫・地山ブロック含む。
26. 2.5Y6/3 黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫含む。
27. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質粘土　地山ブロック含む。
28. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　乳児頭大円礫含む。(SK07)
29. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土含む。地山ブロック少ない。
30. 10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂～細砂　瓦・地山ブロック少ない。
31. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　炭含む。地山ブロック少ない。
32. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　瓦多く含む。
33. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂　漆喰含む。
34. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂　よく締まる。
35. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　炭・焼土含む。
36. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂　炭少ない。
38. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　炭多い。
39. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　炭多く含む。
40. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　拳大円礫多い。
41. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　拳大円礫ほとんど含まない。
42. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　瓦・拳大円礫含む。
43. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック少ない。
44. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂～細砂　地山ブロック多い。
45. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂～細砂　瓦含む。
46. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　47層よりやや暗色。貝含む。
47. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　瓦・拳大円礫含む。地山ブロック少ない。
48. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂　貝・漆喰・瓦・焼土含む。
49. 10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂～細砂　地山ブロック・拳大円礫・瓦含む。
50. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂～細砂　拳大円礫・瓦・漆喰含む。
51. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂～細砂　粘性強い。
52. 2.5Y7/4 浅黄色シルト質粘土　地山客土。拳大円礫含む。
53. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂～細砂　瓦・木片含む。
54. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック・焼土ブロック含む。
55. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　54層に比べて締り弱い。焼土ブロック多く含む。
56. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂～細砂　焼土ブロック多く含む。
57. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂～細砂　56層に比べて締り弱い。
58. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　比較的均質。
59. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂
60. 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土（地山客土）
61. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック多く含む。
62. 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土（地山客土）
63. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　細砂多い。
64. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　細砂多い。
65. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　細砂多い。
66. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質粘土
67. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　地山ブロック含む。
68. 2.5Y5/3 黄褐色細砂～中砂　拳大円礫含む。
69. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　瓦・地山ブロック少ない。
70. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック多く含む。
71. 7.5YR4/1 灰褐色シルト質粘土
72. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　比較的均質。
73. 2.5Y5/3 明黄褐色シルト質粘土（地山客土）
74. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土　均質。
75. 10YR7/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　灰色土・地山ブロック含む。
76. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　比較的均質（城下町建設以前の耕土か）
77. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫含む。(SD32)
78. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　灰色土・シルトブロック含む。(SD31)
79. 2.5Y7/4 浅黄色シルト質粘土（SD31）
80. 2.5Y7/2 灰黄色シルト質粘土
81. 7.5YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土　地山ブロック少量含む。(SD39)
82. 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土（地山）

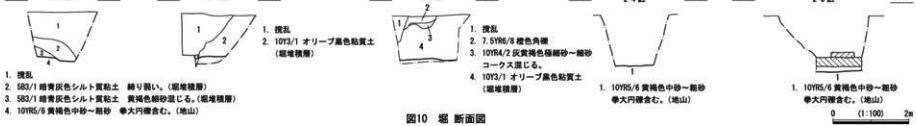
図9　調査区南壁 断面図



1. 盛土・搬乱
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂～細砂　コークス混じる。
3. 7.5YR6/8 橙色角礫　瓦含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　径3cm大円礫・レンガ含む。
5. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　コークス混じる。
6. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　コークス混じる。
7. 10YR3/1 黒褐色中砂～粗砂　コークス主体、レンガ含む。
8. 10YR4/1 褐灰色中砂～粗砂　コークス主体。
9. 10YR7/6 明黄褐色シルト質粘土　地山等土。
10. 2.5Y5/2 暗灰色シルト質粘土　拳大円礫・細砂混じる。
11. 10YR3/1 黒褐色粘土（以下、17層まで堀堆積層）
12. 10YR4/1 褐灰色シルト質粘土
13. 10YR5/1 褐灰色シルト質粘土　細砂含む。
14. 5B6/1 青灰色シルト質細砂　締まり弱い。
15. N5/0 灰色粘質土
16. 2.5Y5/4 黄褐色細砂～中砂　拳大円礫含む。
17. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
拳大円礫含む。混入土。
18-a. 2.5Y5/4 黄褐色細砂～中砂（地山）
18-b. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（地山）
18-c. 5B7/1 明青灰色中砂～粗砂　拳大円礫含む。（地山）



1. 表土・砕石　コンクリート含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色コークス　11層に近い　黒褐色粘土含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂　9層混じる。
4. 2.5Y6/2 灰黄色粗砂　コークス・漆喰含む。
5. N3/1 暗灰色細砂
6. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫含む。
7. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　ビニール製品含む。
8. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂　赤褐色角礫含む。
9. 7.5YR6/8 橙色粗砂～角礫
10. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　レンガ含む。
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色コークス　黄色粘土・灰黄褐色粘土ブロック混じる。
12. 10YR4/1 褐灰色シルト質細砂
13. 2.5Y4/1 黄灰色コークス　レンガ含む。
14. 2.5YR4/6 赤褐色細砂　焼土含む。磁気焼土か。
15. 2.5Y6/6 明黄褐色極細砂～細砂　レンガ含む。
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂　炭多い。
17. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂　炭・漆喰含む。
18. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　漆喰多く含む。
19. 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
20. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂～細砂　漆喰含む。
21. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂～細砂　漆喰・黄褐色ブロック含む。
22. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂　漆喰含む。
23. 2.5Y5/1 黄灰色極細砂～細砂　地山ブロック多く含む。
24. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂　地山ブロック少量含む。
25. 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土　木材・瓦・汽車土瓶含む。（以下、堀堆積層）
26. 10Y4/1 灰色粘質土　やや均質。
27. 10Y5/1 灰色粘質土　やや均質。



1. 搬乱
2. 5B3/1 暗青灰色シルト質粘土　締り弱い。（堀堆積層）
3. 5B3/1 暗青灰色シルト質粘土　黄褐色細砂混じる。（堀堆積層）
4. 10YR5/6 黄褐色中砂～粗砂　拳大円礫含む。（地山）

1. 搬乱
2. 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土
（堀堆積層）

1. 搬乱
2. 7.5YR6/8 橙色角礫
3. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂
コークス混じる。
4. 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土
（堀堆積層）

1. 10YR5/6 黄褐色中砂～粗砂
拳大円礫含む。（地山）

1. 10YR5/6 黄褐色中砂～粗砂
拳大円礫含む。（地山）

図10　堀 断面図

石垣 オルソ

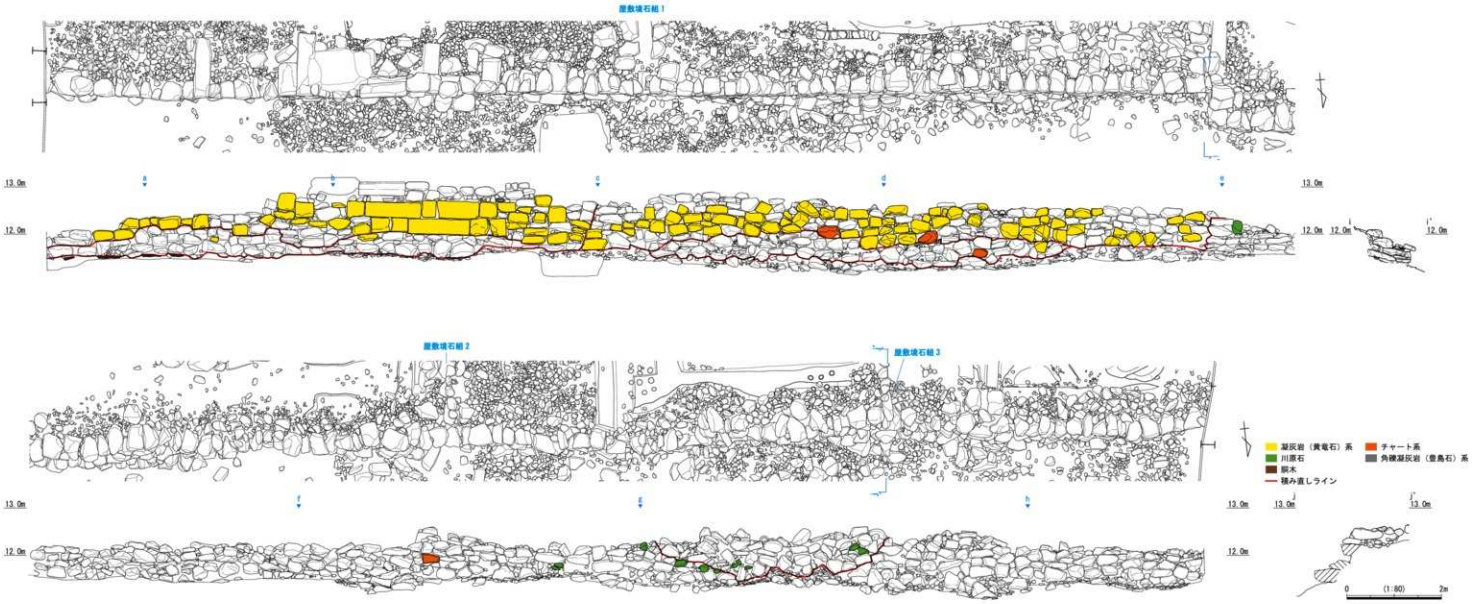
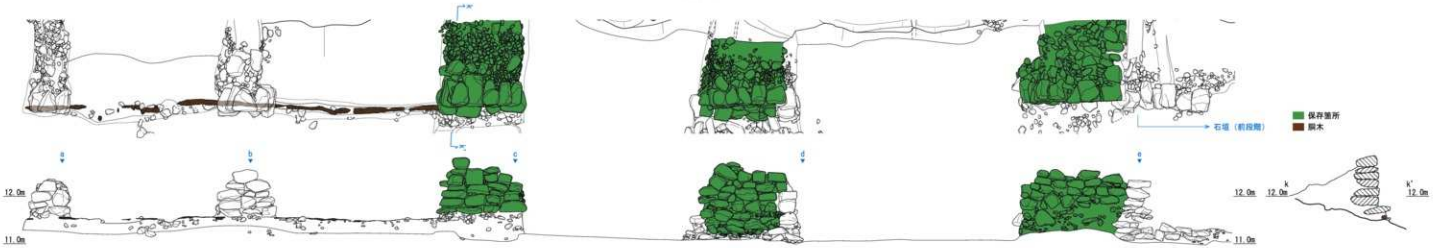
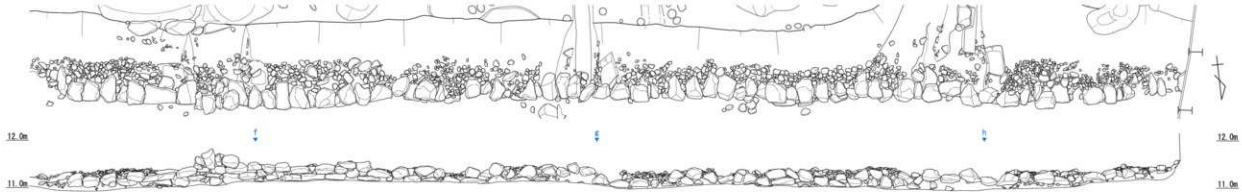


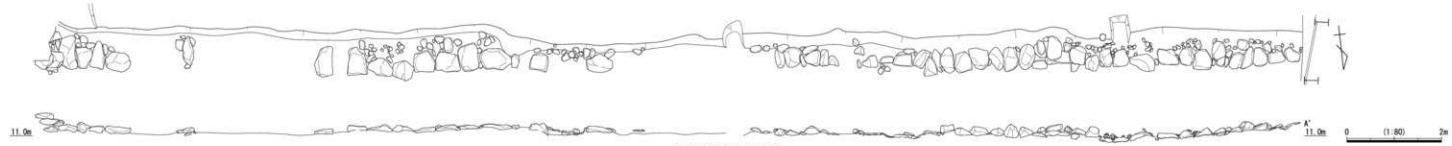
図11　石垣 平・立・断面図

石垣（解体後） オルソ





石垣（解体後）

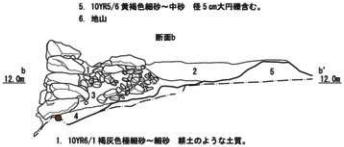


石垣（前段階）基底部

図12 石垣（解体後）・石垣（前段階）基底部 平・立・断面図

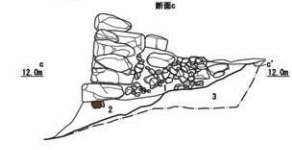
1. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂（近代以降）
2. 10YR6/1 褐灰色極細砂～細砂　耕土のような土質。（近代以降）
3. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂
乳児頭大～人頭大礫主体（巣石層）
4. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
5. 10YR5/6 黄褐色細砂～中砂　径5cm大円礫含む。
6. 地山

1. 2.5Y6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　耕土のような土質。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　径5cm大小礫主体。（巣石層）
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～中砂（石垣崩落層）
4. 5B4/1 暗青灰色シルト質粘土　細砂含む　拳大円礫含む。
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色　極細砂～細砂（石垣（前段階）の巣石層）
6. 地山



1. 10YR6/1 褐灰色極細砂～細砂　耕土のような土質。
2. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　細砂多い。
3. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂
乳児頭大～人頭大礫主体（巣石層）
4. 10YR4/4 褐色細砂～中砂　拳大円礫含む。
5. 地山

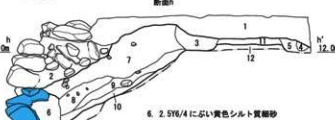
1. 2.5Y5/8 黄褐色極細砂～細砂　地山由来の径5cm大円礫多い。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　径5cm大小礫主体（石垣前面の盛土）
3. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫少ない。（巣石層）
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～小円礫主体（巣石層）
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫主体（石垣（前段階）の巣石層）
6. 地山



1. 2.5Y5/2 暗灰色極細砂～細砂
径5cm～拳大円礫多い。（巣石層）
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色～中砂（石垣基礎部から前面の盛土）
3. 地山

1. 10YR6/1 褐灰色極細砂～細砂（近代以降）
2. 7.5YR4/2 灰褐色極細砂～細砂（巣石層）
3. 10YR5/1 褐灰色極細砂～細砂　径5cm大の円礫主体
4. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫主体（石垣崩落層）
5. 10YR5/6 黄褐色シルト質細砂～細砂　拳大円礫含む
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　拳大円礫主体（石垣（前段階）の巣石層）
7. 地山

1. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　耕土のような土質。
2. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　拳大円礫多い。（巣石層）
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂～中砂　4層ブロック含む。
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　細砂混じる。
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～中砂（石垣崩落層）
6. 10YR4/4 褐色細砂～中砂　拳大円礫含む。（地山）



1. 10YR4/2 灰褐色極細砂～細砂
径5cm大円礫含む。
2. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂
乳児頭大円礫含む。（巣石層）
3. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂
貝・炭色・地山ブロック含む。
4. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂
5. 2.5Y7/4 浅黄色極細砂～細砂
炭色・地山ブロック含む。
6. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質細砂
拳大円礫含む。（石垣（前段階）の巣石層）
7. 10YR5/6 黄褐色極細砂　拳大円礫・細砂含む。
8. 5B6/1 青灰色シルト質粘土
径5cm大円礫・細砂含む。
9. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質細砂～細砂
拳大円礫含む。
10. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質細砂
上層界に一部炭色粘土がみられる。
11. 7.5Y4/2 灰褐色シルト質粘土
12. 10YR8/8 黄褐色シルト質粘土（地山）

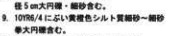
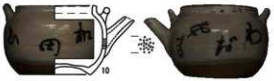
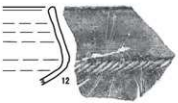


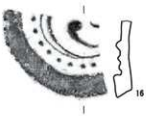
図13　石垣断面a～h 見通し図

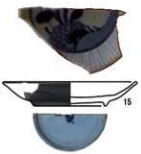
中堀

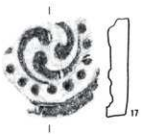


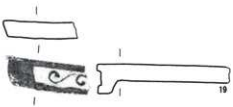
石垣前面盛土・石垣崩落層











0 (1:4) 10cm

図14　中堀・石垣前面盛土・石垣崩落層　出土遺物

図15 石垣裏込（1） 出土遺物

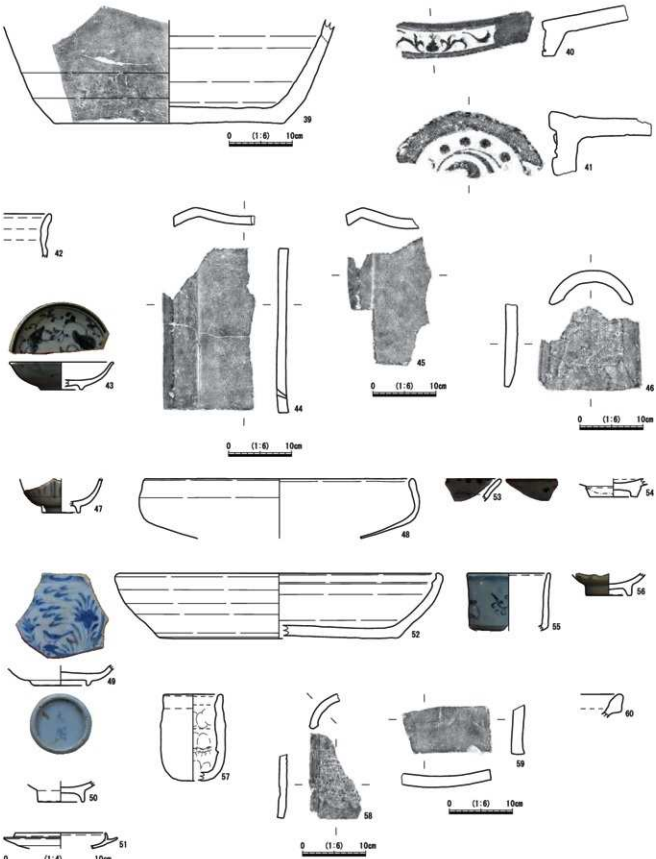


図16 石垣裏込 (2) 出土遺物

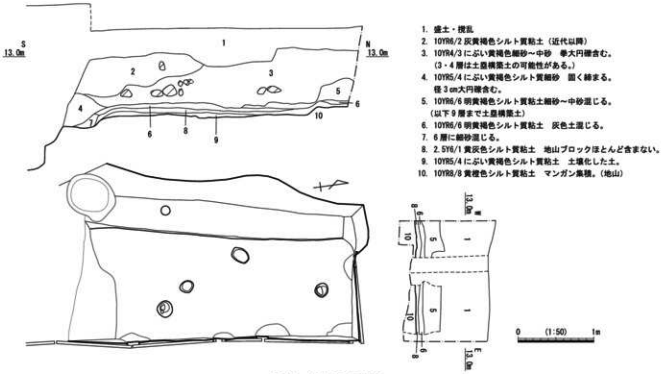


図17　土塁 平・断面図

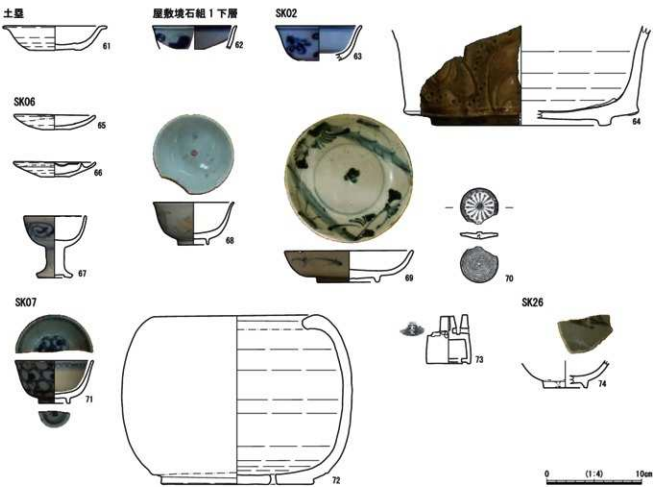


図18　土塁・屋敷境石組1下層・SK02・SK06・SK07・SK26　出土遺物

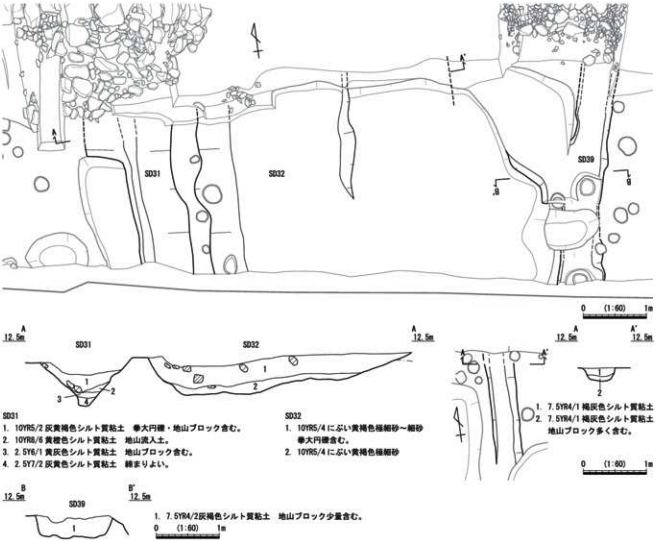


図19　SD31・SD32・SD39 平・断面図

図20　SD38 平・断面図

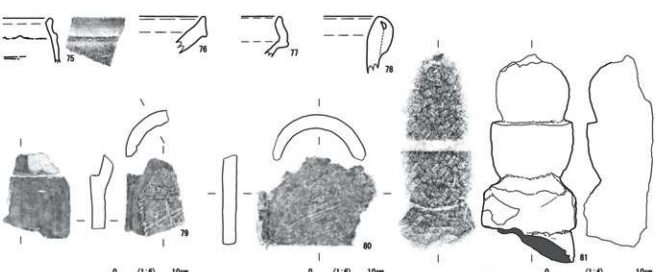


図21　SD32 出土遺物

( ) 内は復元値、単位はcm。

番号	遺構・層位等	種別	器種	口径(長さ)	器高	最大径	底径(幅)	色調	残存	備考
1	中堀 13層	染付	小瓶		残6.0	(3.7)	3.2	瑠璃(釉)	底部完形	陶胎
2	中堀 13層	染付	碗	(12.2)	残5.5	(12.2)		灰白(釉)	口縁1/6	印刷手/内外面に連続した唐草文
3	中堀 13層	ガラス製品	瓶	6.5	5.9	7.4	7.3	ややオリーブ黄透明	完形	
4	中堀 13層	ガラス製品	瓶	1.8	9.0	4.3	4.0	やや黄色ぶい透明	完形	薬瓶
5	中堀 13層	ガラス製品	瓶	4.6	3.5	5.3	5.0	白	口付完形	化粧クリーム瓶 AUBRY SISTERS社製。
6	中堀 13層	ガラス製品	瓶	5.5	8.8	6.4	6.2	青緑がかった透明	完形	「江戸の華」のエンボス。
7	中堀 13層	陶器	耐炎鍋瓦	残12.3	6.3		11.5			大阪電業の製品とみられる刻印
8	中堀 25層	施釉陶器	碗	(13.4)	残5.7	(13.4)	(5.0)	明青灰(釉)	口縁1/4	ベロ縁
9	中堀 25層	磁器	碗	1.5	6.7	2.3	2.2	やや赤紫色透明	完形	薬瓶「タムシ液」のエンボス。
10	中堀 25層	施釉陶器	汽車土瓶	8.6	7.3	13.9	7.5	灰白(釉)	完形	「和田山 わだやま」と書かれる。
11	石垣南面張土 断面b-c間	陶器	把手付鉢	(13.5)	残8.0	(16.4)	(11.0)	2.5Y 4/2灰黄(釉)	底部1/3	丹波焼
12	石垣南面張土 断面d	土師器	焙烙		残6.2			7.5YR6/4にぶい橙	口縁1/15	平行タタキ
13	石垣南面張土 断面d	焼締陶器	擂鉢		残6.6	(21.8)	(13.0)	2.5YR5.3にぶい赤褐	底部1/4	備前焼
14	石垣南面張土 断面e	施釉陶器	碗		残2.9	(9.3)	5.1	2.5Y 7/2灰黄(釉)	底部完形	
15	石垣南面張土 断面e	染付	皿	(14.2)	残2.6	(14.2)	(7.6)	明緑灰(釉)	底部1/2	
16	石垣南張土 断面e	瓦	軒丸瓦	残3.0	残8	瓦当厚1.6		N4/灰	瓦当1/4	左巴文
17	石垣南張土 断面e	瓦	軒丸瓦	残3.4	残10.4	瓦当厚2.4	残11.3	N3/暗灰		左巴文
18	石垣南面張土 断面e	瓦	軒平瓦	残7.5	瓦当高3.3	瓦当厚1.1	残13.6	5Y6/1灰		唐草文
19	石垣南張土 断面e	瓦	軒平瓦	残14.1	瓦当高3.1	瓦当厚1.5		N5/灰		唐草文
20	石垣裏込 断面a 3層	染付	皿	(19.6)	残2.9	(19.9)		明緑灰(釉)	口縁1/5	
21	石垣裏込 断面b 3層	青磁	碗		残3.3	(9.0)	4.2	5GY6/1オリーブ灰(釉)	底部完形	陶胎。高台畳付に砂付着。
22	石垣裏込 断面b 3層	青花	碗		残4.2			明緑灰(釉)	口縁1/10	雲唐草
23	石垣裏込 断面b 3層	染付	碗	(9.6)	残7.4	(10.4)	(4.1)	明青灰(釉)	底部完形	一重網手文
24	石垣裏込 断面d-e間 2層	染付	碗		残3.2			明青灰(釉)	口縁1/20	印判手
25	石垣 断面e 1層	染付	碗		残3.5	(9.4)	(4.6)	明緑灰(釉)	底部1/3	くらわんか手
26	石垣 断面e 1層	瓦	軒平瓦	残7.7	3.1	瓦当厚1.4	10.8	N4/灰		唐草文
27	石垣裏込 断面e西 2層	染付	碗		残1.8	(6.3)	(4.8)	10YR4/2灰黄褐(釉)	底部1/4	陶胎
28	石垣裏込 断面e西 2層	焼締陶器	鉢	(13.0)	残6.5	(13.3)	10.5	N7/灰白	底部4/5	丹波焼
29	石垣裏込 断面e西 2層	瓦	丸瓦	残10.6		厚2.2		5Y6/1灰		
30	石垣裏込 断面e 2層	土師器	皿	(9.8)	残1.9	(9.8)	(7.0)	2.5YR2/1灰	底部1/3	底部糸切り
31	石垣裏込 中～下層 断面e-f間	施釉陶器	皿		残1.6	(8.2)	4.2	10YR4/2灰黄褐(釉)	底部2/3	肥前系
32	石垣裏込 中～下層 断面e-f間	土師器	焙烙		残5.2			7.5YR4/6明褐	口縁1/15	
33	石垣裏込 中～下層 断面e-f間	染付	碗		残4.7			灰白(釉)	口縁1/8	由降り文
34	石垣(前段)裏込 中～下層 断面e-f間	土師器	焙烙		残7.8			2.5YR2/0暗灰黄	底部1/10	平行タタキ
35	石垣(前段)裏込 中～下層 断面e-f間	瓦	軒丸瓦	残3.9	残5.1			N3/暗灰		
36	石垣 断面f 1層	染付	小碗	(5.6)	残3.2	(5.6)	(2.3)	灰白(釉)	1/2	水鼎文
37	石垣 断面f 1層	瓦	棟込瓦	16.7	瓦当高4.8	2.1	12.2	2.5YR2/1灰白		菊文か
38	石垣(前段裏)裏込 断面f-i間	石製品	石臼		残15.3	(30.6)				上臼
39	石垣裏込 断面f-g間	焼締陶器	甕		残16.9	(52.6)	(36.8)	2.5YR3/2暗赤褐	底部1/2	備前焼
40	石垣 断面g 1層	瓦	軒平瓦	残9.2	瓦当高3.6	瓦当厚1.3		N4/灰		唐草文
41	石垣裏込 断面g 2層	瓦	軒丸瓦	残12.0	瓦当高6.7			2.5YR2/1灰白		左巴文
42	石垣裏込 断面g 2層	焼締陶器	壺		残4.6			5YR5/3にぶい赤褐	口縁1/10	3層と接合
43	石垣裏込 断面g 2層	瓦	棟瓦	残26.1		残1.5		N4/灰		
44	石垣裏込 断面g 2層	瓦	棟瓦	残20.8			残11.7	N4/灰		
45	石垣 断面g 3層	瓦	丸瓦	残13.9	残5.4		残13.3	N4/灰		コビキ有
47	石垣 断面h 1層	染付	碗		残3.6	(8.7)	(4.0)	灰白(釉)	底部1/5	よろけ蔦文
48	石垣 断面h 1層	土師器	焙烙	(28.6)	残6.3	(29.7)	(28.8)	7.5YR6/3にぶい橙	1/2	
49	石垣裏込 断面h 2層	染付	皿		残2.1	(11.2)	6.3	灰白(釉)	底部完形	花鳥文
50	石垣裏込 断面h 2層	施釉陶器	碗		残2.2	(7.1)	(4.9)	5YR/3灰黄(釉)	底部3/4	低・信楽系
51	石垣 断面h 4層	施釉陶器	灯明皿	(9.6)	残1.7	(12.0)		10R4/4赤褐	受皿1/7	受け口が付く。
52	石垣 断面h 7～10層	焼締陶器	甕	(34.7)	残6.9	(34.7)	(25.5)	2.5YR4/4にぶい赤褐	底部1/5	備前焼。右桔(前段裏)裏込と接合。
53	石垣 断面h 7～10層	施釉陶器	皿		残2.4			7.5YR/1灰(釉)	口縁1/9	肥前系
54	石垣 断面h 7～10層	施釉陶器	碗		残1.9	(7.2)	(5.0)	2.5Y/3黄橙(釉)	底部1/7	肥前系
55	石垣 断面h 7～10層	染付	型紙碗	(8.8)	残6.1		(8.8)	明オリーブ灰(釉)	底部1/3	
56	石垣 断面h 7～10層	染付	碗		残2.3	(7.7)	(4.8)	N8/灰白	底部1/2	
57	石垣 断面h 7～10層	土師器	焼塩壺	(6.3)	残9.2	(6.9)	(5.3)	5YR7/6橙	底部1/4	
58	石垣 断面h 7～10層	瓦	丸瓦	残13.6		最大厚1.3	残7.9	N5/灰		コビキ有
59	石垣 断面h 7～10層	瓦	平瓦	残7.8		最大厚2.0		N4/灰	1隅	
60	石垣 断面h 12層	丹波焼	擂鉢		残2.5			7.5YR5/4にぶい褐	口縁1/20	
61	土塁 3・5層	施釉陶器	鉄釉皿	(11.0)	残2.6	(11.0)	(5.3)	7.5YR4/4褐(釉)	底部1/2	
62	焙烙遺石組上下層	染付	碗	(8.9)	残2.5	(8.9)		灰白(釉)	口縁1/4	瑞文蔦
63	SK02	染付	碗	(9.1)	残3.7	(9.1)		灰白(釉)	口縁1/3	瑞文蔦
64	SK02	施釉陶器	鉢		残10.5	(27.4)	(18.9)	2.5Y7/4黄灰(釉)	底部1/5	
65	SK06	施釉陶器	灯明皿	8.7	1.7	8.7	2.9	5YR/2灰白(灰釉)	完形	
66	SK06	施釉陶器	灯明皿	8.7	1.7	8.7	3.0	灰白(釉)	完形	受け口が付く。
67	SK06	染付	仏飯具	6.6	6.5	6.6	3.9	明緑灰(釉)	底部完形	
68	SK06	染付	碗	8.5	4.5	8.5	3.3	明緑灰(釉)	底部完形	瑞文蔦
69	SK06	染付	皿	13.7	3.4	13.7	6.7	5YR/2灰白(釉)	完形	
70	SK06	土製品	由子		0.7	3.9		5YR6/6橙	3/4	菊文
71	SK07	染付	碗	(8.2)	残4.5	(8.2)	(3.3)	灰白(釉)	1/2	瑞文蔦
72	SK07	施釉陶器	鉢	14.8	17.9	24.4	16.2	5YR3/4暗赤褐(鉄釉)	口縁完形	
73	SK07	土製品	不明		残5.1	4.7	4.6	10YR6/4浅黄橙		十穴(ヵ)の印刻
74	SK26	施釉陶器	碗		残2.6	(9.2)	(4.6)	5YT/2灰白(釉)	底部1/3	肥前系京焼風陶器
75	SD32 上～中層	土師器	鍋		残4.6			10YR6/4にぶい黄橙	口縁1/20	
76	SD32 上～中層	焼締陶器	擂鉢		残3.6			2.5YR6/6橙	口縁1/14	備前焼
77	SD32 上～中層	焼締陶器	擂鉢		残4.3			7.5YR4/3褐		備前焼
78	SD32 上～中層	焼締陶器	甕		残6.0			5YR4/3にぶい赤褐	口縁1/20	備前焼
79	SD32 上～中層	瓦	丸瓦	残13.4				N5/灰		コビキ有。吊り紐
80	SD32 上～中層	瓦	丸瓦	残15.2		(最大厚2.3)	残14.8	5Y6/1灰白		
81	SD32 上～中層	石製品	～石5輪塔	残21.9		(最大厚8.0)	残10.0	2.5Y6/2灰白		破面に投付着

表2 出土遺物観察表

写真図版 1

土塁断面（南東から）

土塁断面詳細（東から）

中堀断面A－A'（北東から）

1-2区西壁（東から）

中堀断面B－B'（西から）

中堀断面B－B'部分（西から）

遺構写真（1）

石垣（北東から）

屋敷境石組1（北から）

石垣屈曲部から西側（北東から）

石垣屈曲部（東から）

石垣（北西から）

屋敷境石組2（北から）

遺構写真（2）

写真図版 3

石垣断面a（西から）

石垣断面b（西から）

石垣断面c（西から）

石垣断面d（西から）

石垣断面e（西から）

石垣断面f（西から）

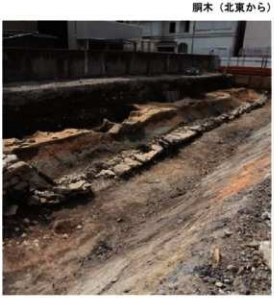
石垣断面g（西から）

石垣断面h（西から）

遺構写真（3）

胴木（北東から）

SD31断面（南から）



石垣（前段階）屈曲部から西側（北東から）

SD39断面（北から）

石垣（前段階）の築石の一部（北から）

調査終了段階の石垣（前段階）基底部（北西から）

遺構写真（4）

報告書抄録

ふ り が な	ひめじじょうじょうかまちあと
書　　名	姫路城城下町跡
副 書 名	姫路城跡第445次発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第121集
編 著 者 名	南　憲和
編 集 機 関	姫路市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和4年（2022年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市元塩町101番（ひょうごけんひめじし もとしおまち）	28201	020169	34°49′55″	134°41′44″	2021.1.13～2021.4.16	769㎡	住宅建築

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
姫路城城下町跡	集落跡	近世	石垣、堀、屋敷境石組、土塁、溝	土師器、陶磁器、瓦、土製品、石製品	20200466

要　約

姫路城南部中堀の南面石垣から北面する土塁にかけて横断的に調査を行うことで、近世から近代にわたる中堀周辺の変遷を把握することができた。

石垣ラインは途中で堀側に屈曲しており、その屈曲部は石垣（前段階）が崩落した後、前面に流出した栗石と土砂の上に石垣を再構築したことで生じたこと、積直しは18世紀中葉以降に行われ、以後部分的に修築されながら近現代まで維持されてきたことが明らかになった。石垣が崩落した原因としては、寛延2年（1749）の市川の出水による水害に関連する可能性が高いと考えられる。

中堀以南の外曲輪において町屋の敷地境の石組溝を3条検出した。また、城下町の下層で検出した3条の正方位の溝から、城下町建設以前の地割は16世紀後半まで存続していたと考えられる。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第121集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第445次発掘調査報告書―

令和4年（2022年）3月31日発行

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079）252-3950

発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0278　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2